

地域の歴史に根差し、児童がいきいきと生活する学校をつくる

●特に重視する設計上（意匠・構造・設備・ランドスケープ等の各分野）の配慮事項

01 地理的条件と登下校ルート

- 旧群馬町境に近く農地に囲まれた敷地には、北西（榛名山）や北東（赤城山）方向からの冬場の厳しい季節風が想像されます。そこでグラウンドからの校舎本体への土埃を排除するためには北側校舎案、西側住宅地への影響を低減するためには西側校舎案が、それぞれ有効と考えられますが、ここではさらにそれらの利点を兼備する、北・東側に防風林、校舎を西側に寄せつつ各教室への通風採光に配慮したジグザグ型校舎を提案します。また、国の「エコスクール」整備に対応する校庭の芝生化も検討したいと思います。
- 分離新設後の新しい学区が、敷地の東西に大きく分かれ、特に東の菅谷地区からは児童がバイパスを横断して登校することから、校地北側道路の延長上に歩道橋の新設が要望されています。このため、主たる登校路は北東および北西の両敷地角、補助的には南西角からの出入りが考えられます。こうした出入口が建物の死角に入らず、校舎内からの見晴らしがきくように平面計画を工夫します。
- 現在の堤ヶ岡小学校が集落の中にあり、新設校が農地の中という立地の違いを活かして分離後の2つの学校が2つの学区の児童に共有され、時に応じて合同行事、合同学習が行えるような相互補完的な空間を計画します。また、両校の児童や教員の往来が安全で快適に行えるよう、2つの校地と結ぶ天王川沿いの緑道の整備を提案します。北側から南側にかけて緩やかに傾斜する敷地の特性を活かし、緑道側から引き込まれた中庭にレベル差を設け、体育館のボリュームを校舎全体に調和させます。

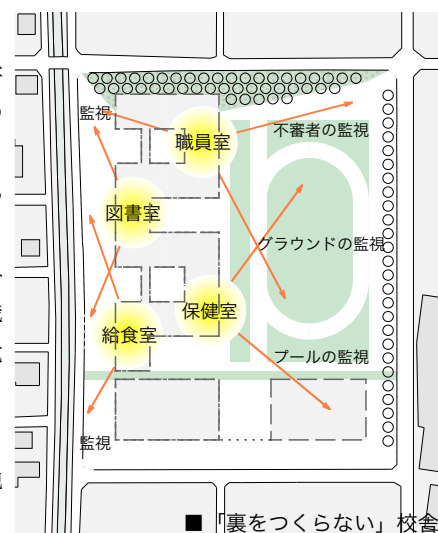


02 地史的な文脈と地域学習の拠点としての学校

- この土地の歴史を遡れば、古墳時代には水田が広がり、後には国府が置かれ東山道が整備されるなど、交通の要衝として栄えました。その後、浅間山噴火の火山灰による地質の変化から、養蚕業へと転換しますが、校地の周囲にはこうした歴史資源が豊富に残されています。これらを小学生の教材としてだけでなく、地域全体をエコミュージアムととらえ、大人たちを含めた地域の学習に活かすための、コア施設としての小学校を提案します。

03 小学校を取り巻く今日的背景／「開かれた学校」と安全・安心

- 戦後の画一化した学校施設づくりから、地域性に根差し、また地域の人々が積極的に学校教育に関わりが持てるような「開かれた学校」へと変化してきました。一方で2001年の大阪池田小、2005年の寝屋川市中央小の事件などによって、再びそれが「閉ざされた学校」へと後戻りしつつある現状があります。しかし高崎市のプロジェクトチームの報告にもあるように、単に門に施錠する以前に、地域の人々の目配り・気配りを強化するという、より基本的で重要なことがあります。そのためには死角に繋がる「裏」のない校舎、敷地への侵入者を見渡せる職員室の他、保健室、給食室などの、大人の目の有効活用などを意識した校舎づくりが必要です。また地域開放可能な施設を1階に集約し、教室群は直ちに危険の及ばない2階に集める工夫をします。
- 新しい住民が集まるこの地域の「都市化」した将来を想像するとき、「まち全体が大きな学校」と捉える新しい時代の教育への対応が必要です。今まで以上に「学校・家庭・地域社会」が連携し、地域コミュニティ活動の拠点としての学校計画が求められています。緑道に沿った校舎の1階部分全体が地域のための学校として機能します。



04 学校教育上の機能的な要請に応える

- 小学校教育における「基礎・基本」の充実を約束する教育空間を考え、オープンスペースには、現在の堤ヶ岡小学校が既に力を入れている少人数教育に対応する、奥行きが浅い小さな空間を随時作り出せるようにします。またチーム・ティーチング(TT)に対応できる両面黒板の部屋、またコミュニケーション障害や学習障害(LD)にも対応できる場とします。



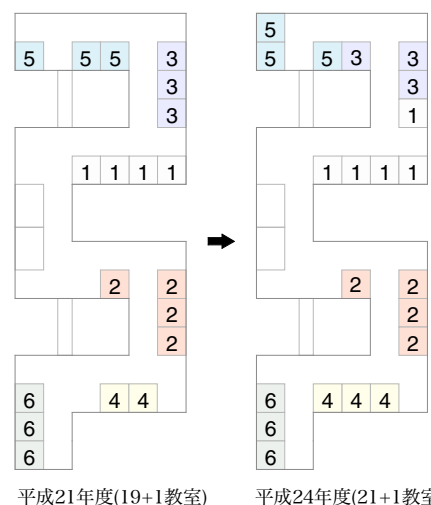
- ・ 児童の「コミュニケーション力」の向上を約束する学校空間を提案します。学年集会はもとより、ワークショップ型の実践的教育が可能なスペースを随所に設け、異学年の交流や互いの授業が自由に参観できる開かれた教室づくりを考えます。またこれから必要とされる英語学習、国際理解などのさらなる充実のために、無線ヘッドセットの設備や、英会話力を高める機器の導入にも対応できるよう準備をします。
- ・ 学校と「地域社会」の結びつきを深める学校施設づくりを行います。校舎内の各所に児童の学習履歴が常設展示できるスペースを設け、異学年生はもちろん、分離後の堤ヶ岡第一小の児童や、父母や地域の人々などが、子供の成長過程を直接見る事が出来るようにします。自分の自慢のものが飾られることで、学ぶ楽しさを覚え、学習に対する内的な動機付けが行われます。またメディアセンターにインターネット放送やテレビ会議、DTPによる新聞などが発行できる設備を設け、学校内と地域の人々を結びつけます。



■ワークショップ型の授業を周りから参観できる

05 生活の舞台としての学校空間

- ・ 内部を窺にくい従来の教室は、とすると教室を密室化し、王国化してしまいました。これが学級崩壊の遠因となったことはよく知られ、反対に開かれた教室では、身近に多様なスペースがあることで、児童どうしの話し合い活動が盛んになり学級崩壊を抑止するといわれています。ここでは学校全体を、もっぱら授業を受けるための「教育空間」だとは捉えず、一日の長い時間を過ごす「生活空間」と考えて設計します。さらに学童保育、あるいはそれ以外の児童も放課後の校内に安全に滞在できるスペースを考えます。
- ・ 群馬県が進める障害児の統合教育に対応して、この学校の児童が自然にユニバーサルデザインを体得できるような校舎をデザインします。校舎内での各室の配置計画においても、教育や管理の効率からのみ計画を行うのではなく、障害を持つなど弱い立場の児童のための空間を優先して決めていくようにします。また、現在の堤ヶ岡小学校でも取り組んでいる資源のリサイクル学習を充実させられるよう、校内に「リサイクル基地」を設けます。



06 将来的変容に応える柔軟性、環境的な提案

- ・ この校舎の最大の利点は、新たなウイングや別棟を建てることなく、各学年1～2室程度の増設が既存の躯体で容易に行える点にあります。また学年別教室の再配置や、学年構成の変更なども、教室に付随するオープンスペースを利用して、自由に伸縮が可能です。後から付け足された棟はどうしても不便で、他の機能との繋がりが不自然になりがちですが、この案ではその心配が少なくなります。
- ・ 今日では様々な要因によるアレルギー、化学物質に対する過敏症など、学校建築においてシックスクールへの対応は不可欠です。「学校環境衛生基準」に則り、冬以外の3シーズンはもちろん、床暖房を行う冬季においても、終始効率的な換気が行えるように建築の平面、断面を工夫し、校舎の内外装においては可能な限り自然素材を用いて、原因物質の排除を徹底します。
- ・ 中庭が上下の空間を視覚的に結んで児童・教員の交流を促すほか、昼間の自然採光、自然換気、また夏季は館内の熱気を夜間に放出するなど、多面的に機能し室内環境を快適化します。大きな屋根面を置き屋根化して断熱性能を高め、集められた雨水を有効に活用するなど、全般に消費型の資源エネルギーの使用を抑え、循環型の自然エネルギーの活用に努め、ライフサイクルコストの低減を図ります。

■教室配置の変容

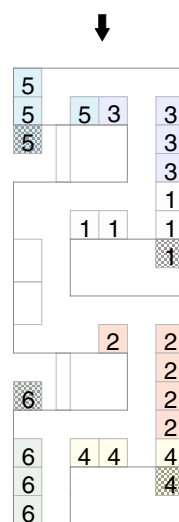
平成21年度：19+1教室



最大22+1教室まで
既存躯体で増設可能



別棟にすることなく
26+1教室まで増築可能



最大教室確保時
(26+1教室)

07 住民が参加して学校をつくる

- ・ 私たちはこれまでに町立ミュージアム、村庁舎、市民会館などの様々な公共施設の設計において、その都度それぞれにふさわしい住民参加ワークショップを企画し、実現してきました。堤ヶ岡第二小学校においても、「小学校施設整備指針」に基づいた学校づくりのために、学校教育の専門家も交えて、児童やその保護者の皆さん、学校や行政の関係者、地域の人々と共に、最適なワークショップの方法を模索・実現したいと思います。地域住民の皆さんによるよりよい学校づくりの取組みを、ひとつずつ目に見える成果をもって確認、伝達できるよう、ポスター、VTR、ウェブサイトなどを活用して、より多くの市民に共有される開かれた学校づくりを目指します。

■群馬県中里村
小中学生ワークショップ

